

日建連建築セミナー開催報告

動的設計論

「振る舞いからつくる建築」



講演の様子。右には、スライドを紹介する中村氏。スクリーンの映像は「Ribbon Chapel」(2013年)。

一般社団法人日本建設業連合会(以下、日建連)は、去る十月二十六日に「日建連建築セミナー」を東京証券会館のホールで開催した。講師には建築家の中村拓志氏をお招きし、「動的設計論」というテーマでご講演いただいた。

人の振る舞いに着目して建築をつくる。

中村氏は「Ribbon Chapel」(第57回BCS賞、2013年竣工)をはじめ、住宅から公共施設まで幅広く手がけている。冒頭では、お辞儀などの日本人独自の振る舞いや、日本庭園に見られる飛石や茶室の躡口など、伝統建築には人の振る舞いを誘発するデザインが存在するを指摘。そのようなデザインに興味があり、人の振る舞いに着目した動的設計論を展開するようになったと説明した。また、敷地に残る立派な林を極力伐採せずに、樹木の立ち方に応答させてつくった「Dancing Trees, Singing Birds」(2007年竣工)、「録 museum」(2010年竣工)などを紹介。木の振る舞いに人間の振る舞いを寄り添わせることで、自然と人間が一体化した建築を目指したと述べた。

多くの人が共感できる建築を目指して

「人や物の動きを観察し、振る舞いから建築をつくることは、従来の鳥瞰的な視点で建築をつくる際に見落としてきたことを拾えるのではないか」と中村氏。設計時には、その建築に関わる人それぞれの行動を細かく丁寧にも想



セミナーの後半では日建連建築設計委員会委員長を務める尾崎勝氏(左)が加わり対談が行われた。

像することで、発見があると語る。「狭山湖畔霊園管理休憩棟」(2013年竣工)では、「周囲の美しい景色を全開にして見せるのではなく軒の高さを低く抑えた屋根としました。これは故人を思い、悲しむ人は俯がちであるため、その視線に水紋や木漏れ日などの自然が入り込み、自然を眺めながら故人を想う内省的な空間としました」と述べた。

日建連建築設計委員会委員長の尾崎勝氏が加わった対談では、中村氏の学生時代の話や独立当初の苦労話、設計時の思考の仕方などについて話題が広がった。最後に、「さまざまな価値観がある中で、人間が長年積み上げてきたものや、自然としたくなるような振る舞いをテーマにしながら建築をつくるのが、多くの人が共感できる建築になるのではないか」と述べてセミナーを締めくくった。